

石原千秋著 『読者はどこにいるのか : 書物の中の 私たち』

稲田, 大貴
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/19889>

出版情報 : 九大日文. 16, pp.67-70, 2010-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

◎書評

石原千秋著

『読者はどこに居るのか』

——書物の中の私たち——

稲田 大貴
INADA DAIKI

本書は、「逃げ遅れたテキスト論者」を自認する著者による読者論である。

河出書房新社が二〇〇九年十月に創刊した「河出ブックス」シリーズの一冊として、本書は刊行された。本シリーズは「大学生以上、知的な大人まで」が主な読者層として想定されている。それに従って本書も研究者のみに向けられたような難解な文体は避け、丁寧な説明が平易な文章で書かれる。とはいえ、その内容は決して「軽」くはない。確かに研究者にとつては既知である読者概念を丁寧に、易しい言い回しで問題化させてゆく手付きにはもどかしさすら感じる。しかしそれを足掛かりとして提示される「内面の共同体」という概念は、著者自身が আগেきで述べているように「やや舌足らず」ではあるものの、今後の近代文学研究における可能性を提示している。「内面の共同体」とは、「何かを共有している感覚」を基とした、「読者意識／読者としての意識」という人間の内部への志向を持つ

共同体」と説明される。既存のテキスト論では、テキストは現実世界から独立した、閉じられた世界と見做されていた。このような現状を受け、著者は本書において読者の側から閉鎖されたテキスト世界を破ることを試みる。そのために仮設されたのが「内面の共同体」という概念である。以下、各章の概略を提示しつつ、読者概念から「内面の共同体」へと接続される過程、そしてそれが近代文学研究に投げかける問題を見てみたい。

第一章では、近代文学研究において読者が問題として浮かび上がってくる過程が辿られる。漱石が描いた「自我の空虚さ」を反転させて引き受けた白樺派によって提唱された「近代的自我」が、作家論パラダイムを生み出し、近代文学研究のメルクマールとなったことが述べられる。この後に現れる作品論は二つの方向性を持ち、一つは作家論パラダイムを引きずった「作家の意図」を読み込むもの、もう一つは近代批判のパラダイムに基づいたものである。しかしこの近代批判においては、論じる対象である作家より論者自身の思想性が前景化しているにもかかわらず、未だ読者は問題化していないことが明らかにされる。とはいえ作品論によってある程度、作家と作品が切り離されたことで、テキスト論以降の文学研究の下準備となった。

第二章では、テキスト論以後の近代文学研究における方法論の概略が示される。構造主義は作品を起源としての作者から切り離すテキスト論を導いたものの、「読者の誕生は「作者」の死によってあがなわれなければならないのだ」というバルトの言葉に示される「読者」は未だ現れていなかった。「読者」が

出現するには、ナラトロジーの導入によって「語り手」が設定されなければならなかった。そうして「語り手」の言葉の受け手としての「読者」がここに現れ、「作者」は「読者」という外部を持った。それによって真理は「作者」から「読者」の手へと渡り、複数化されたことが述べられる。そしてポスト構造主義、主に構築主義や主体の複数性の主張が説明され、カルチュラル・スタディーズにおけるナシヨナリズム研究からポスト・コロニアリズムへと接続される。著者はこの間の「読者」は実体化されたものであり、その研究は「政治的正しさ」を基準として行われてきたと論じ、その上で読者研究の「別の道」を模索することを提言する。

第三章では近代読者の誕生から、「内面の共同体」がどのように形成されたかが論じられる。成田龍一、永嶺重敏の論を引用しつつ、「われわれ」意識を持つ「読者共同体」の形成から四つの「読者」グループが生み出されたことが確認される。昭和初期の「円本ブーム」はこれらのグループを横断するものであり、それによって明治・大正期の近代文学が新しい「古典」として受容されたことが「内面の共同体」の基礎となった。こうして現れた大衆読者によって読書は教養から消費へと転じ、国民国家という「想像の共同体」が形成される。こうしたカルチュラル・スタディーズの成果を踏まえ、黙読による個人の断片化が他者との比較を不可能にし、それゆえに自己と他者の内面が同じであるという「想像」による「内面の共同体」が形成される。そしてそれは、国語教育や図書館といった制度によつ

て支えられると著者は論じる。このように説明される「内面の共同体」概念は「想像の共同体」としての国民国家を前提としながらもそれに先んじるといって「誤解—錯覚」によって「想像の共同体」としての国民国家を堅固なものにする役割を果たす。しかし「内面の共同体」を生きる読者は国境に縛られるものではなく時空間を超え、それを生きることができる。そのような読者を著者は「それはどういう読者なのか。その読者はどういう感性をもっているのか。そして、そのような読者はどこにいるのか」という問いでもって見出そうとする。これは本書を貫く問いになっている。

第四章においては「内面の共同体」と現実世界の関わりが論じられる。まずアルペール・ティボーデが参照され「小説の普通読者」がどのような読者であるかが問われる。この問いは十九世紀リアリズム小説の発明と密接に関わる。十九世紀リアリズム小説は「客観性」が重視され、作者が直接介入しない文体ゆえに現実から相対的に自立した小説世界を構成する、個別的な営みである黙読に適した小説であった。著者は黙読の特性である多読と孤独を「普通読者」の要素であると述べ、その孤独は「内面の共同体」に向かって開かれていると論じる。また物語の四つの型（オープンエンディング）が示され、それによりH・R・ヤウスが提示する「期待の地平」が構成されることが述べられる。具体例として、水俣病患者を撮影したユージン・スミスの「入浴中のトモコ」を論じたロバート・スコールズの論が取り上げられ、この写真に聖母マリアという「期待の地平」が

共有されていることが確認される。「期待の地平」は芸術の価値を計る基準ではなく、芸術を論じる概念であるとし、その上でそれが共有されているという事実が「内面の共同体」が成立していることの証であると論じられる。

第五章では読者を軸として、受容理論と「内面の共同体」との接続がなされる。小説が「終わる」ことは、その全体を読者が手に入れることと説明される。この読者が手に入れる全体とは、小説をフィクションとして読むこと、すなわち終わりから始めを逆算するように解釈する自由である。そしてそれは個人主義と関わりながら「内面の共同体」を形成することが述べられる。では、どのようにそれはなされるのか。読者は小説を読むに当たって「全体像」^{ゲシクナルト}を持っており、それに合わせてテキスト中の「空所」を補填することでテキストに参入する。それはテキスト分析の為の概念である「内包された読者」の立場に立つことよって可能になる。しかしテキストを自由に読むことは困難である。現実の読者の自我は社会的に拘束されており、その解釈は共同体ごとに定まっており、S・フィッシュはそれを「解釈共同体」と呼んだ。著者はこの「解釈共同体」の一つの「内面の共同体」の具体的表れであると論じる。

第六章では芥川龍之介『蜜柑』の分析を通じて、「内面の共同体」が時代を超えて「伝染」することの確認と語り手についての考察が行われる。著者は日本近代文学史の系譜を説明しつつ、十九世紀末のヨーロッパ文学の「倦怠」の気分が大正年間になつて書かれた、つまり「倦怠」という気分を共有する「内

面の共同体」が「伝染」したと述べる。また高橋龍夫の論文を参照しつつ、その気分は横須賀という固有名詞が持つコノテーションによっても説明できるとも述べている。『蜜柑』における「私」の「倦怠」あるいは「憂鬱」は、このように説明される。続けて「私」の乗っている汽車がロングシートであるにも関わらず、ボックスシートであると読者に「誤読」させる語りを見出すことで、「語り手」に着目する。小説テキストの「内在する読者」に對置される「内包される作者」は実在しない概念であり、決して読者に語りかけない。語るのは「語り手」である。そして「語り手」を機能させるのは「内包される読者」であることが説明される。このことを踏まえ『蜜柑』は一人称小説だが、語り手は「私」の外部にあり、読者は語り手と共犯関係にあることが確認される。またJ・H・ミラー、J・ラカンが参照され、小説の構造としての全体性は「語るいま」という時制に保証あるいは制限されていると論じられる。しかしその「語るいま」とは小説が書かれたその時ではなく、読者によつて読まれる「いま」において機能する。このことを著者は「語り手」とは読者だったのだ」という刺激的な一文をもつて綴る。

第七章においては性別と文学の関係が論じられる。国語教育が「内面の共同体」形成の装置であることから、教員自身の性別がいかにテキストの読みと関わっているかという問いが提起される。それに対し、現実の性別を離れて「女として読むこと」が提案され、読者が感情移入するポイント、つまり「内面の共同体」形成の契機としての「主人公」概念の再考が行われる。

フェミニズム批評と「主人公」とは、「女として読むこと」で二項対立の境界、すなわち「意味論的場の境界線」を越える主人公を「発見」することにおいて関わる。確かにその読みは生産的だが、読者が感情移入するのは「小説テクストに構造的に組み込まれた主人公」である。この主人公のレベルにおいてフェミニズム批評を揺さぶる具体例として、著者は江國香織『きらきらひかる』を取り上げる。『きらきらひかる』は精神病の笑子とゲイの睦月という夫婦を交互に視点人物とする構造を持つ。この構造によつて笑子を精神病と捉える「常識」からの視点、換言すれば「男の目」からの視点は相対化され、読者は「女として読むこと」を意識化させられる。つまり読者自身の「性別」が問われていると著者は論じる。

最後に第八章では、これまでの議論を踏まえて柄谷行人の「近代文学の終り」への反論が試みられる。著者は柄谷が「内面を書くことと内面を読むことの違いを考慮していない」とした上で、読者は外面から書かれていない「内面」を読み取ると述べる。このことについてストーリーとプロットの再考が行われる。同一テクストは読者の問いかけによつて、時間的接続のストーリー、あるいは因果関係によつて接続されるプロットという様相を見せる。つまり読者の「なぜか？」という問いにより浮上するプロットではそこに既に外面から「内面」が読み込まれているのである。その具体例として、探偵小説である東野圭吾『容疑者Xの献身』が取り上げられる。靖子親子の犯罪を隠蔽するため罪を犯した石神の携帯電話に関する供述の違和感から、そ

の内面（犯罪の動機）の複数の解釈可能性が提示される。これは「真実（内面）は一つ」という欺瞞は解釈の更新によつて暴かれる、すなわち問主観的な「内面の共同体」は個別の解釈によつて揺るがされるといふことである。常に未完成な「内面の共同体」は「終り」を志向しながらも決して終わることはない。このように論じて著者は「近代文学は終わらない。それは近代文学の読者が終わらないということだ。」と本書を締め括る。

本書が提示する「内面の共同体」概念は、文学と社会との相互交渉を捉えるための概念である。社会の中で生き、文学を読む読者がそれを形成するわけだが、著者が述べるようにこの営みには決して「終り」がない。しかし「終り」は常に志向されなければならないのではないか。詭弁を弄するようだが、そうでなければ近代文学は「終る」。「終り」続けること、それによつてのみ「内面の共同体」は更新され、形成され続けるのではなからうか。

最後になったが、本書は文学研究の入門書としても非常に有用に思われる。これまでの研究史の概略、文学理論にも多く触れられており、なにより「逃げ遅れたテクスト論者」を自認する著者によるテクスト解釈は、優れた読みの実践例である。そして本書を入口として文学研究を志す「読者」が現れ、「終り」を志向しながら生産的な解釈を生み出し続けるだろう。こうして「近代文学は終わらない」のである。

二〇〇九年十月 河出書房新社 二一九頁 一、二〇〇円＋税

